

女性史の方法覚書 河野信子

高群逸枝論 石川純子

『恋愛論』を読んで 西川祐子

柳田国男の婚姻史像 栗原弘

■たより

■編集室メモ

高群逸枝のまなざし 石牟礼道子

# 高群逸枝 雑誌

創刊一九六八年

# 30

季刊 高群逸枝雑誌第三十号  
一九七六年一月一日発行

責任者・橋本憲二 発行所

〒八六七水俣市幸町六一  
高群逸枝雑誌編集室

電話○九六六六一三一四〇三〇  
振替東京九一四六八三三

定価二〇〇円

講談社文庫

高群逸枝  
自伝

# 火の国の女の日記

解説 濑戸内晴美

# 女性の歴史

上 四八〇刷 円  
下 五六〇刷 円

上 三八〇刷 円  
下 四四〇刷 円

新刊発売

高群逸枝

# 恋

解説 石牟礼道子

# 愛

三〇〇円

# 論

講談社

東京都文京区音羽2-12-21  
〒112

振替 東京3930

# 高群枝全集



全 10 卷

未開の分野に拓いた科学的女性史  
詩と眞実の結晶・愛と学問の原典  
女性がはじめてうちたてた金字塔

第六刷

若き世代の中に浸透しつつある彼女の全業績と人間像――

## 女性の歴史

女性の手になるすぐれた歴史書  
高群さんの女性史の研究は、学界において独歩的地位を占めている。今までの歴史はほとんどすべてが男性の手で書かれて来たために、女性の生活についても多くの見落しを免れなかつた。それは「いわゆる進歩的女性史」の研究である。女性の手で成るが故に、女性の立場から痛切な訴えをきくことができよう。  
私は、高群さんの一連の労作に、学問と情熱とのすぐれた結合を見る。女性の歴史がひろく渉猟され、するどく分析され、きびしく論考されつつ、絶えずその間を繋つて詩想とも「女性の歴史」は、これまで専門の論文にもっぱら取り組んで来られた著者が、ひろく勢の人たちのためにその見解を披瀝されたものである。私たちはそこに女性の立場から痛切な訴えをきくことができよう。

家 永 三 郎  
阿 部 知 二

- |                |      |
|----------------|------|
| 第1巻 母系制の研究     | 三〇〇円 |
| 第2巻 招婿婚の研究 I   | 三〇〇円 |
| 第3巻 招婿婚の研究 II  | 三〇〇円 |
| 第4巻 女性の歴史 I    | 二八〇円 |
| 第5巻 女性の歴史 II   | 三〇〇円 |
| 第6巻 日本婚姻史 ■恋愛論 | 二〇〇円 |
| 第7巻 評論集恋愛創生    | 二八〇円 |
| 第8巻 全詩集日月の上に   | 二八〇円 |
| 第9巻 小説/隨筆/日記   | 三〇〇円 |
| 第10巻 自火の国の女の日記 | 二八〇円 |

菊判クロース装上製本美貼函入  
全卷平均 520 ページ  
全卷摘要価 30,000 円  
<詳細内容案内書呈 25 円>

東京都新宿区  
若松町一〇四 理論社 振替東京 95736

## 女性史の方法覚書

(10)

河野信子

擬制とは、廢絶すべき明日へむけて、無意識界によつて強いられる妥協の様式でもある。制度化された側にいるものが、自己の胎内に育つてしまつた改变の因子を、未来の視点で迎えるわけにもいかず、破綻をまねがれる唯一の方法として、擬制なるものが一時定着する。もとより、未来において定着するべき改变の因子は、すべて人間の美質の全面開放となるわけではなく、善悪とは無縁な時代の相によつて強いられるものでしかない場合が多い。

擬制婚取婚という婚姻形態——承久乱(1221)頃から南北朝(1336)頃までの——は、文字どおり婚取婚を擬制するものであつて、それは婚取婚ひいて全招婚の最終段階に位置する形態である。前に第六章第一節でも述べたように、内実は夫家に妻を迎えるものであるが、その夫家を妻の領と觀念し、夫がそこにいながら婚取られる擬制式の方法がとられる。これには後にくわしくみるように二つの型がある。一つは、婚姻開始に際して、男の親がます他へ避居し、そのあとへ妻が移徙して婚取婚を挙行するもの、他の一つは、婚姻開始すなわち婚取婚は妻家でおこない、男は相当期間妻家に通い、または住み、男の親が避居もしくは死

この時代、行政上の権力は、すでに男性の手にあつた。でありますから、女系の觀念を背に負い、いながら婿とられる方式に、いくつかの仮説が入り組んでいる。たとえば、つぎのように。日本型の権力は、つねに中央にむけて集中するので、それぞれの族は、武力または行政力において相接し、異族を組み伏せるにとどまらず、自族の内部をも序列のものとに組み込むものである。ここで、男系を背に負つた同族の觀念が定着しておれば、兄弟相喰み、殺戮にいたる無限地獄に陥るしかなく、同族結合の理念など、現実によつてたやすく反撥されるものとなる。だから相喰むべき力学をもつたものに、同族を許容するのは、なじみがたい觀念であるので、族制は女系に

よつた。また、中央にむけて権力を集中していけば、権力をわけどろうとするものは、つねに繁雑であり、流動たえまないものである。同族内部で生育の義務をともなつた支配の位置は、重く、流動など許さぬものである。したがつて、権留の集中にむけて動きまわるもののは、同族によつて強いられる定着の役割から解除されていなければならぬ。この国では、幸いにも父系同族の観念は定着せず、母系同族の観念に支配されているので、同族内部に男性を固着させる力は強力ではない。

このように、農業という、きわめて高い定着度を要する生産の様式を基盤としてなりたつてゐる経済を根幹におき、そこにいくつかの氏族を踏み越えながら、中央政権にむけてこばれていく人物像を重ねて、権力の井戸をみるならば、族母たちの連合体のうえに、族母の抽出体としての女王をおくピラミッド型はなりたないわけであり、族制は母系、族長相続は父系と併存していはいるだけ、都合のよいものとなる。古来、体制型であれ、反体制型であれ、すべて権力の争奪をはかるものは、家族からなにがしかの離脱をはたし、母子家庭にとどまらず父子家庭なるものが、現代では、よりいつそう悲惨の色を濃くしているのも、力に接触する論理に内在する視点でもあろう。

これらの仮説は、あくまでいつぱうに農業生産を基盤にした生活様式があり、他方に、農業を組み伏せながら、中央政権にむけてこばれていくものがあるといつた立場にたつものである。族制はこの余波をうけて、父系の定着をおくらせたと。この國、建国譚を東征に措き、荒ぶる神、征伐されざるひとびと、とどまるところを知らず、入り乱れたとされていたあたりから、設定された人物の実在、不在はともかく、ひとつの文化系が、命あるものをいつくしみ育てるところよりは、戦乱に明け暮れていたことを示すものである。

ひとつの原理が、「最後の抵抗と権威」を示し得るためには、人間の保守性だけではなく、担い手の力量によつて維持されている部分が、共同性のなにがしかの要となつていなければならない。この要となる部分こそ、女によつて担われた労働と呪力（あるいは靈力というべきもの）にある。この労働と呪力を要としている部分に「最後」とされるものがあり、母性原理は、しだいに女性原理の側に変容しつつあつた時代である。

女性の靈能については、「女性の歴史」にくわしく、「この世の成り立ちを、生命系の秘奥から、のぞきこんでいるまなざし」（右牟礼道子『高群逸枝のまなざし』講談社文庫、高群逸枝著『恋愛論』に付せられた解説）をもつ高群逸枝なればこそ真理の固たさを得た論理である。ここで崩壊期にかかる擬制の過程で、この呪力（靈力）をみなければならぬのは、心をえる思いではあるが、すべて擬制は表面であり、どのように硬ばろうとも内質を閉塞しつくせるものではない。現代、呪力を呪力と措きかえ、未見の明日にかかる心性を捉える疎外を解こうとしているが、いつぱうでは、この行為は、今日から擬制の部分だけ解除することになりかねるものである。ここに擬制解除期にさしかかった共同体にかかるひとつの記述がある。

——平原インディアンは鳥の羽毛を頭につけて野牛狩をし、他部

この文化系にまきこまれば、労働（組織化と管理）をもふくめての担い手と、戦乱の担い手は分離する傾向をもつ。マーガレット・ミードの調査（『男性と女性』）に記されたムンドグモ族の文化の型は、人間に内存する素因を語つて示唆に富む。この族は、川のほとりに住みながら川にまつわる伝承を持たず、男は陰謀と戦乱にあけられ、女は、労働を担い男たちを養うが、子供を育てることを極端に嫌っている。ひとつのが族が荒びの系譜でだけ、とらえられるものかどうか、アメリカ人であるミードの報告からは、推測できがたい領域ではあるが、力の支配を他の部族におよぼすとき、男も女も精神の荒廃に騒いでいる。ひとつの部族が荒びの系譜でだけ、とらえられるであろう仮説は、すべての論理を権力との接触に引きしづつたところになりたつものでしかない。

すべての文化系が、武力による支配との接触によつてなりたつわけではなく、個体をつらぬく時間でさえ、興奮の時とその解除にときわけられるわけだから、中央政権にむかうとどまることを知らない。ふたたび擬制婚取婚の二種の形態をみてみよう。ひとつは、婚姻開始と同時に妻が夫の家（夫の親たちは避去している）に移るもの、他は、婚姻の儀式は妻家でおこなわれ、夫は一定期間妻家に通うか住むかして、夫の親が去つたのちに、妻が夫の家に移り住む形態である。『招婚婚の研究』によれば、庶民には、後者の型が多く、子の養育も、前者の場合、出産の費用をもふくめて夫の負担であり、後者の場合は、出産および産児の世話は、妻家で受持たれている。となると流动たえまない力の支配によつて擬制婚取婚を受容した精神を触知するのは、矛盾におち入ることになる。擬制の段階は、やはり、高群逸枝によつて規定された精神によつて、存立可能となつたものとるべきである。

祖父江孝男は、共同体の内部で呪力をもつた僧侶の役割を果すもの、武力の練成の過程でこぼれ落ちるしかないものを教う安全弁だと指いている。すでに武力と呪力を通わせる道は微細となり、共同体は武力の行使にむけてのみ熱狂し、以前靈力の担い手であった女の衣服に似せた衣服を着せることによって、僧侶として生き残るとは、共同体ぐるみ武力にむかつて雪崩れていくことを示している。「社会的評価は概して高くないようだ」とされたあたりは、呪力の担い手の頂点には、常に女性がいて、そのなかで両性具有とされた男性は、低い地位に甘んじなければならないのか、武力と呪力の担い手は、共同の原理を二分するにいたらず、女性祭司はすでに去り、両性具有とされた男性によつてのみ呪術的役割が果されたのかは、祖父江孝男の論述から推測することは困難である。まして、インディアン社会は、巨大な中央集権化にむかうことの希薄な社会であり、呪力なるものが、中央の権力にむかつて通底することによつて、計りがたい世界である。女性の靈能の政治的の場からの後退は、『女性の歴史』にくわしく、靈能によつて権力に通底することによつて、計りがたい世界である。女性の靈能が、中央集権化の時間の経過にしたがつて分散解除潜

行にいたつたのにくらべて、労働からの解除は、たやすく定着するものではない。

「女捕」は主として道路上でおこなわれた。これを辻とりともいった。この期の作品とされる「石清水物語」では、今上帝さえも、里から夫家の帰途の道上にで盛みとて、強引に藤蔓に見えるという不穏な挙に出ている。しかもわれひとともこれを純潔の運命とみて、とがめようともしないのである。こうした辻とりの犯行は、しかし、そのおおくは社会の階級分化からもきていくとみられる。ようやく無妻の環境に追いやられつづった下層者は、道路上にみる露人にたいして求婚の資格を失っているまさに、これを暴力で拉取し、露生の宿にともないかえつて同棲するという方法をえらんだわけである。つまり、「大和」のあさか山物語、「さらしな日記」の竹芝寺物語等の先例を道路上でおこなつたわけである。(『招婚婚の研究』全集版第三巻一〇八六頁)

なにがしかの意味で家を担つた婚姻の儀を欠落させている部分で「辻とり」はなされ、この「犯行」は、御家人、郎従、法師の別なく括がつてある。これらの階層は、身分にかわりなく流動しつづけるひとびとである。辻とられる女もまた一族にとって重要な労働の扱い手ではなく、都市化していく部分に群れて生活するものに連なる女たちのようである。

労働の場で、共同性がなりたつておれば、どのように主要な扱い手でも、そのひとりを引き抜くことによって、共同性まるごと崩壊に導くような労働も存在しなければ、人物も存在しない。男も女も、労働を担うことにかかるかぎり、その主要さは相対的なものでし

かない。だから、婚姻なるものが、男女のいすれかいつぼうを、共同体から引抜くことを意味するとき、形態の変容は受容できないものでないが、きわめてゆるやかにおこなわれる。『招婚婚の研究』にみられる擬制婚取婚の乙型(妻家で婚姻開始をし、のちに妻家が移徙する)は、庶民に多いとされたのも、労働になにがしかの要をおいているとみなければならない。また、擬制の時代を経ねばならないかつたのは、妻家の側で労働の主要な扱い手であるから手離さなかつただけでなく、子の婚姻にともなつて、避居しなければならない夫家の親たちの事情にもよる。

現代とはくらべものにならぬほど、住居の建設が負担を要しないものであつたとはいえ、別棟の家を建て、移り住むことはたやすいことではなく、それ相当の財力を要する。母系原理または父系原理による家族ならば、他の家族から引き離した男または女を、新しく生れる子供たちとともに包括するだけですむ。内部で増殖しつづけ、同居するものたちの反発と葛藤の果てに、分散にむかつたとしても、子の婚姻の時期を境ににして、精神に強いられる避居ではなく、内外に育つ条件を基盤にしつつ分散するものでしかない。

ひとつ原理から他の原理への移行が、概念の場では、すでに父系を内在させながら、「異系カマドの反撥」という非妥協の一点を核にして、擬制婚取婚はなりたつてある。これは、「極端にまで神経質な單婚家族」「極小の家族形態」(前掲書全集版第三巻九七二頁)を貫徹するために、経済上の実利よりは、遺存させた原理を形態の終末に重ねた。家の火所に宿る靈神は、女にとつては内存する神であつて、たやすく外来神に習合させるわけにはいかぬものである。仮りに靈神そのものが、他界との世を往き還り、山から里へ往復するものであつて、靈だけに固着しえない存在であつたとしても、内在する固有の神であつて、入替不可能なものである。

母系の意識の消滅は、すでに内部に孕まれていたともいえる。

現代、ひとびとは、自己にまつわる系譜の意識をようやく解こうとしている。擬制は、靈とか神棚とかいった身近に引寄せ得るものではなくたが、擬制としての父系は男女両性にまつわり、父系の呪縛のもとにある。労働の共同性を、数世代の共労によってひとつの父系のもとにになりたせる基盤を失つた地域では、日常的には忘れられながら、生活の節々に顔をだし、精神を呪縛する。擬制としての父系は、現実の父親を超えて、系譜を引きしばるものに代置され、きわめてシンボリックなものに集約される。かつて、内在神としての疎外感が籠つたように、疎外感は初期の主体との痛切な関連を忘失して、異系の文化のもとにあつた、剣とか鏡などに移り、やがて、唯一の剣、唯一の鏡となつて機能する場を残している。父系の呪縛が、唯一の剣、唯一の鏡に象徴されている精神を解かぬかぎり、父系・母系がそれぞれに展開した擬制の意味は解けぬであろう。

## ■恋愛論〔三一新書〕 河野信子

(異性を呼ぶ精神の核)  
(名著紹介・編集室)

四五〇円

東京都千代田区

二二一書房

## ■寺田操「対なるエロス」

高群逸枝「恋愛論」「恋愛創生」への試み  
「あんかるわ」

37  
38  
39  
40  
41  
42  
連載中

豊橋市弥生町  
東豊和19-3

磯貝満氣付

## ■高群逸枝の入院臨終前後の記録

橋本憲三記

コピー実費  
送共九五〇円

高群逸枝雑誌編集室

## ■高群逸枝論

初期高群の思想形成

宮沢睦美

実費送共  
一七〇〇円

高群逸枝雑誌編集室

# 高群逸枝論

「絶対愛」

13

石川純子

1

たいようと  
たいよさん  
たいよさん  
どうぞ、りょうちゃんの虫さされをなおしてください。  
どうぞ、だいちゃんのちょろまをおしてください。  
どうぞ、ママのおっぱいを目にしてください。

今までに西の山脈に沈まんとしている太陽に向って放たれたことのものいのり。このような無垢なる心に反照されて、あの呪文がわたしの心の中にももどってきます。

西の乳房を目にする  
西の乳房を目にする  
.....  
.....

つぶやいていると、額のずっと底の間に目が吸い込まれてゆくような気がします。そうして目は外界に向って白く直たまま、身の内に発光します。まるで乳房の目に光がともりでもするようだ。そのやさしい目に導かれて逸枝の本に向れば、今までなげなく読みすごしていたことば一つ一つの裏々からわき立つてゐる気配のようなものにとりまかれて、読み進めなくなってしまうところが況

「自分は自分の性分（愛）……」（P.355）

「力と信念にみち  
愛にもえつ  
所とのしごとにばげもう  
(略) (わが祈りを心にいのる) (P.356)

「われわれの愛は、郷土愛たると人間愛たるとを問わず、一方的に存在し、「内部的なうごき」として実在するものであることを私は信する。（P.44）

「愛は信念」という語。愛の信念に立つときには安心がありうる。（略）愛が信念化していれば、動搖することはない。愛は魔物をすら愛しうるからだ。」（P.513）

「そのいたりつく革命された段階の新社会のあり方は、個や孤独とはちがつたもの、共同体のありかたの社会だと私は思う。愛を原理とするありかたの社会だと思う。」（P.45）

「思想がちがつても愛は原理です。」（巻9 P.234）

「愛」

私は了解する 幼時から 私がもとめ続けたのが、正義ではなく、より多く愛であつたことを  
正義は概念で  
愛は具象だ  
正義は不確かだ

「何が正しいか」は 時によつて変わるし 人によつても変わる ふたしかだ  
「みなが平和に そして共同に生きうる 世の中へ」  
私の愛のねがいは これだ  
これだつたのだ ああ私は幼時から 愛をもとめてきた  
全身で愛をもとめてきた  
私はいまそれを 了解する」（P.355）

山あります。

たとえば、この乳房の目が、本当に長い間とらえて離さないことが「愛」ということばがありました。「愛」はおそらく高群逸枝がその全集の中で、最も数多くくりかえしていることばでしょう。ちなみに今、日記をばらばらめくつてみても、こんなふうに語られています。

「節範退学後の絶望状態にあって、心の根柢を見失おうとしていた。何より苦しかったことは愛の心が弱まり、孤独という冷酷な事実に直面したことにつたと思う。（巻10 P.97）

- 8 -

- 9 -

乳房の目は、次のようなところへ私を連れてゆきます。そうして、逸枝の髪に真向わしめ、さあ、おまえの今までの△理解▽で、ここが本当に見えるのか、とでもいたげに私をおいこんでゆきます。

「私は子どもの頃から、個人悪を見まいとする強い本能をもたされてきた。それは一種の重荷でさえあったが、成長後もやはりおなじ態度をもち続けた。だからこの点で私は逃避的でさえあつたろう。個人善のみが私には唯一の心の対象であつたのだから。

こういう態度は、いわゆる「リアル」でない事情や諸性格を私のなかにつくりだしたのだった。個人的には「不争の私」たゞほめることだけに限定された私。だからそれは私にとつてはどうしようもない本然のうごきでもあつたのだつた。

私は夫のエゴイズムを尊敬し、それに魅了された。けれど私自身はいぜんとしてもとどおりなのだつた。私は時には自ら腹を立てながらも自分に負けたのだった。個人悪に対する私のあまさが尋常一様でないことに負けたのだった。そして個人悪は現象でしかなく、本質ではないのだと理論的にさえ正当化し出したのだった。正か否か。

私には悲しみのみがあつて憎みはない。いや憎みはあるけれど、すぐ中途で流されてしまう。その流されたの早さよ。私は「人間なのか」（火の国P.398）

わたしは、そんなこととうにわかつているのに、わたしの心とあんまりにもちがいすぎる。あんまりにもちがいすぎると思つてしまします。そうしてしばらくの間、次へ読み進めなくなつてしまします。しかし、乳房の目は容赦しません。確実に同じようなところへ私を導き、私の今までの△理解▽がどんなに皮相なものでしかなかつたのか納得させようとかかってきます。

「人間の信念はひどくあややなものである。とくに私がそうで

ることに耐えなかつた。そうしたらむしろ気持らくであり、事実もかえつて好転すると思われた場合でも、それは私の内在の敵命に屈し、人への愛と和を希わすにはいられなかつた。

しかし、それと対立する私の外在我一対立といつても憎みや怒りの性格ではなく、無知、混迷の性格だが一は、これまた頑固に私の外形をなし、その意味で私と不離一体をなしていたともいえる。（略）つまり外在我は私にとって不離なものであつたけれど、歪められた相対我であり、内在我こそ私の絶対我一といえるなら一であつたのである」（巻9 自叙伝ノートP.508）

あまりにも長い引用をしてしまいましたが、半年余りもこんなところを見つめていたところで、どうしても書いておきたかったのです。

このようないから発せられる逸枝の△愛▽、何度読みかえしても、△理解▽ができるというふうなわかり方で、納得できる質のものではありませんでした。それよりも私は、長い間このようなところにおのれの心を向きあわせられることで、遂に自分の心を見つめさせられたように思います。この、逸枝の対極に位置するような△愛▽、△愛▽なることばが、おくられてくる沈黙の世界にたどりつくには一どころか、自分しか見えない、エゴのかたまりのような自分の心を、そのような心で、さしのぞいた逸枝の世界。△慈悲▽なる魂などと書きながら、本当は何もわかつていなかつたのです。そのことに気づいた乳房の目で、もう一度私は逸枝の世界を見つめてみたいと思いました。逸枝は、隨筆の中で、富士谷御杖という人の言葉を引いてこんなふうに解説しています。

「彼によれば、ことばの彼方にひろくふかい沈黙の世界がある。ことばはそこから淨められておくれてくるものだ。」（略）「巻9 P.152」

ことばが淨められておくれてくる、逸枝の「ひろくふかい沈黙の世界」を

ある。私の信念でいちばん動きがないのは、「善惡」的な面であろう。

私はすべての人、動物、植物、無生物にたいして、「善意」をもつて生きている。生きていくこうとねがつて。そのことを私は私の信念としている。たまたま反対概念が私の心におこり、私のそうした人道主義的な生きかたを批判しても、私はすり泣きながらも、なお私のそうした生き方をかえることができないでいる。だから、これだけは私にとつて、動きのとれない信念であることがわかる。

私はそれと反対の生き方をする、私の心の息がとまつてしまふ経験をいくどもしてきた。つまり、それなしには、私は生きていけない人間なのである。」（巻9 P.420）

「実存哲学をよむ。きびしい自由、孤独の自我一この境地はわかる。二〇世紀人は多少にかかわらずこの境地にあるといえる。ただ私という人間をみつめてみると、すすぐなれてくるほどあまい善人にはいなまれていた事実だけが存在したのだった。そして、二我的矛盾にさいなまれていた事実だけが存在したのだった。

内在我はすぐれた知性であり、動かない愛であつたということができる。外在我はそれと鋭角的に対立する愚鈍と混迷と動搖だった

と思う。この二我にはさまれて、私は自己の「個性」を言葉の表面的な意味では確立しえなかつたが、しかも私なりには頑として確立していたのだった。

たとえば、私は人を憎むことに一のみでなく冷酷または不和であ

した。

こうして『火の国』から、何度目かのくりかえしの読みが始まつたのです。

こちらの目の変化で、逸枝のことばはまた新しい世界を開いて、わたしの前にありました。そうして『火の国』九六ページ、例の、宇佐美教授の「人生暗黒説」へ反論した、「感想録」の一節に来たとき、わたしは自分の直観とことばが火花を散らすようにして浮き立つてくる一つのことばに出会わされました。

「自分ト他人トノ間ニ何カ共通ノ生命ガアル」「人心共通ノ生命ガアリ」というところです。この感想録は、前にも引用したことがありますが、逸枝は次のように書いていたのです。

「過日父上ヨリ宇佐美文学士ノオ話ヲ承ル。ソノ一節ニ「人生ハ暗黒ダ、人間ハ孤独ダト云ウヨウナコトヲ云々テイル学者ガ多クイ」ト云ウコトヲ聞イテ、種々ナ方面カラ、孤独ト云ウコトヲ考エタ。ケレドモ不束ナ少女ニ分ロウ苦ガナク、浅薄ナル學識ト、僅々十七ノ初々シイ経験トヲ以テシテ、カカル広漠ナル問題ニ通ジヨウ苦ガナイ。

只思ウ。人間ハ、磊々タル石クレノ築リヤ、泥酔同士ノ勝手ナ高

談デナク、信ヲニシ、望ヲ共ニシ、愛ニヨクテ結合スル融合俱会ノ生活デアルト。

遠ク、大キク、人生トカ、宇宙トカラ論ズルマデモナク、近ク自分ノ心ソノ物ヲ見レバ、コノ真理ハ明ラカデアル。感覚ハ外界ノ印象ヲ得、理会ハ外界ト内心トヲ結ビツケ、記憶ハ過去ノ我ヲ今ニ活カシ、予想ハ未来ヲ与エ、感情ハ人ト人トヲ結ビツケ、意志努力ハ生命ノ發展ニ向イテ働く。タトイ人ハ受憎ノ外ニ、怨憎、嫉妒、復讐ノ情ガアルニシテモ、コレラハツマリ、自分ト他人トノ間ニ何カ共通ノ生命ガアルノヲ、根本ニ仮定シテイルシルシデアル。故ニ茲ニ人心共通ノ生命ガアリ、人生ノ孤独デナイ証拠ガアル。」（一は石川）（P. 97）

さてここからは、どうぞこの自分の直観がピントはずれでありますせんようとに、念じながら書かねばなりません。私にはまだ、この感想録の文脈も、そこからぬきだした「人心共通ノ生命ガアリ」という一節もよくわからないのです。逸枝が「遠ク、大キク、人生トカ……論ズルマデモナク、近ク自分ノ心ソノ物ヲ見レバ、コノ真理ハ明ラカデアル」と書いているように「人心共通ノ生命」にしても、これらは逸枝が「体認」しているとも言うべき世界ですから、そうたやすく見えようはずがないのです。ただ、わたしは今、「人心共通ノ生命ガアリ」ということばをめぐってこんなふうに反応しています。（このことばに對して、今は考へるというような段階ではなく反応しているような段階でしかない）おのれ一個を他と駁別しおれしか見えずおのれの利害で他を色別してしまう目、それに対して自分と他の共通の生命を体認したところから発せられる目——この逸枝のまなざしは、私などには想像もできなかつたのだな、といふ思いが、まずは第一の反応です。がその二つの目のちがいだけはわかるような気持になります。そうすると、「われらもはや自他の繫縁を根拠にしている」（東京は熱病にかかる）というこ

う。この呪文をからだ中にかけめぐらせながら。私は生まれかわらね

ている）

というような不可思議な氣泡をたちのぼらせてよこしたりします。「宇宙そのものであることの発見と体化」。このようなことばを前にすると、ますます私は『沈黙』の世界なるものを感じないわけにはいきません。「体認」といえばよいのか「体化」といえばよいのか——逸枝が観音の子とされる中で、生得的に持たされた「絶対愛」の世界——その『沈黙の世界』をさしのぞくには……わたしはやつぱりわたし自身の、『乳房の目』にかける以外どうしようもないのです。

両の乳房を目にする  
両の乳房を目にする

ばならないでしょ。最も身近かにいる子供たちは見ぬいています。

「だいちやん、いつまでもおっぱい飲むがら、ママのおっぱい、さつば、お目にならないねえ。」（おどけた）「ママ、りょうちゃんなど、いつも怒んだべ。ママ、ほんとね、おっぱいの目で見でんのがや」おっぱいの目で見ると、本当の目で見るよりやさしく見えることがあると言つてきかせたことがありました。が、それでもかかわらずママはいつもがみがみと怒りまくる。それもこれも弟が、いつもママのおっぱいにしがみついているためなのだろうと、兄は兄なりにこう言つてゐるのです。このようなことのやさしさにさし向けられて、わたしは今、乳房を目にする道を歩まされているよう気がします。

「平和な理性によつては来ない。

本質によつて、  
彼と我との繫縁によつて、  
その発見と体感とによつてのみ来る」（東京は熱病にかかる）

いる）

これらもまた「人心共通ノ生命」の体認から発せられたことばだろうという気がします。

とすれば、この「人心共通ノ生命ガアリ」ということばは、あの△愛▽なることばが送られてくる逸枝の「ひろくふかい沈黙の世界」に、真すぐに至りうべきことばなのかもしません。しかし、「人心共通ノ生命」などということばは逸枝自身の体認している世界ですから、わたしの前には「ひろくふかい『沈黙』の世界」でしかないのであります。

そうしてそこから、時々逸枝は、

「愛は結局自己自身、  
宇宙そのものであることの発見と体化によつて、  
その終局を告ぐべきものの正体である」（東京は熱病にかかる）

# 『恋愛論』を読んで

西川祐子

あらたに文庫本となつた高群逸枝の『恋愛論』を読んでいるうち、私は、最近、十九年前に卒業した高校の同窓会に出席して、むかしの生物学の先生に再会したことをおもひだした。

その教師は私たち生徒の眼にはすでに高齢者であるように映つてゐた。小柄で、猫背で、古びた背広のうえから黒襟のかかった綿入れをひつかけ、足袋に下駄をはいていることもある男であつた。そういつたかつこうから、そのひとは校舎とは別棟になつてゐる生物教室に住みついているようにおもえた。つまり他の教師のように職業生活と別のところに家庭生活があるひとには見えなかつたのである。

生物学教室は陽当たりがよく、窓の下は、生物の教師が園芸部を指導して色とりどりの花を咲かす花壇になつてゐた。授業のあいまには、綿入れをはおつた背をのばすようにして、その教師が一つ一つの花をのぞきこんでいる姿がみられた。まるで一つ一つの花の個性をたしかめているようにみえた。また花をのぞくのと同じ注意をはらつて高校生たちを観察し、一年のうちにめさめきと成長する若い肉体の変化をいちいち口にたして批評するというので、女子はおかしがるし、男子は好色爺であるとはやしたてていた。美しいひとの

多かつた同級生のあいだで花煙の土色の虫である心地のしていた私はその教師に近づくことなく、遠くから眺めていたが、彼の異国的なほど日焼した皮膚の色や、深いしわの刻まれた顔の片側にだけうかぶため強烈な皮肉の印象をあたえる笑いが不思議におもえ、彼の眼は子どもたちを見ながら、実は遠く別のところを見ている気がしてならなかつた。私が彼の花壇の草花のうち特に紫、ピンク、白の花を咲かすえんどうの花をよくおぼえているのは、彼が教室の黒板に大きな掛軸をたらしてメンデルの法則を私たちに教えたとき、窓の外にその花がほんとうに咲きみだれていたからであろう。

生徒たちは生物学の時間といえば、もう最初から笑いころげようと待機えて椅子に坐つてゐた。実際、さわぎの種はいつもあつた。あけはなつた窓からは花に集まる蜂やアブの類がしょっちゅう飛びこんできた。春のうららかな日に、うす汚れた白い迷い犬が教室の下に坐りこんで動かなかつた。一同が息をこらしてみると、先生は上気嫌で、片手に一本の花をかかげてあらわれた。犬には眼もくれず壇上に立つと、小柄なひとが大きくみえた。そして口をひらくとゆつくりはつきりと、しかし生来の甲高いキイキイ声で「諸君、生植は何を意味するか。個体の死を意味する。諸君、長く生きること

を望むなら、純潔と童貞を維持すべし。」と言つた。生徒は総立ちになつて歎声をあげた。一番前の席の男の子が教室に駆け上つて人体標本の腰骨をやさぶると、笑い声のようなカタカタカタという骨の音が鳴る。生物の教師はたちまち空いている方の手をのばして悪戯者をその耳でとらえるが、先生の眼は笑つてゐる。生徒たちはもう弾けるように笑つてゐる。教師のとつておきの冗談がでたのだと理解して、椅子の上によじのばつて笑つてゐる。最後に先生があおむいて口をあけて笑うと、前歯の欠けた口の中は暗い洞穴のようであつた。

この教師は一時間の授業のあいだに多くを喋べらなかつた。私たちのノートは毎回およそ数行の筆記でおわつた。書きためられるところの短い文章には、反語と謎がみちており、互いに矛盾しているよううにみえた。気の速くなるほど速い彼方の時間からやつてきた生命は、どこへ行くのか。私には、自然界に矛盾がひしめいているのか、それとも教師の斜めにかまえた姿勢からくる解説が介在して謎を生むのか、判断がつきかねた。

今年の十月に、卒業以来、一度も帰つてきたことのなかつた校門をくぐると、同窓会の刷物をてわたされた。そのなかに生物学の教師のことばがあつた。

「人間を構成する細胞は時々刻々新陳代謝をしながら個性を失わない。貴方達に常に話した処。

『逝者如斯夫不舎昼夜』

人間とは生きているものではない。生かされているものだ。齡十七十四を迎える心静かに感謝の日々をすごしています。

『南無不可思議光』

石段の上に、秋の午後のすでに傾きかけた陽ざしをあびて、ござっぱりした服装のふくよかな老人が佇んでいた。先に着いた同級生

が「あら不思議。先生は若がえつた。あたしのこと覚えています」とはしゃいでいた。すっかり白髪であつたが、顔のしわが消え、色白になつてみえる。ちらつと横目を走らす眸はむかしのままであつた。「美人はおぼえていますよ。」と言つた。しかしつづけて、運れてきた私の方にむきをかえ、「優等生もおぼえておる。」と言つたので、私はたちまち土色の虫けらの境地に転落し、彼が昔とこそしもかわらぬしたたかな老人であることをおもいしらされた。秋の黄色の陽だまりのよくなこの暖さと、その昔強烈に感じられたニヒリズムはおそらく同じものであるのだった。

高群逸枝の『恋愛論』を読みながら、関係のないこのひとのことをおもひだしたのは、『恋愛論』冒頭にある生物の講義のような文章のせいである。解説の石年礼道子氏が「この世の成り立ちが見えてしまふまなざし、といふものがあるとおもうのです。」といわれているのは、この生物学的なものの見方についてであろう。

高群逸枝にとつては、『恋愛論』は、大正十四年の『恋愛創生』と、そして昭和五年に雑誌『婦人戦線』においてなされた議論の大成である。終始貫してゐるのは、個にとつての恋愛でなく、種にとっての恋愛の意味を考えている点であろう。『恋愛創生』は、題名のごとく、恋愛に種としての人類の将来を選択する権利をやだねようとした。雑誌『婦人戦線』において一年余つづいた共同討議は「生殖の自然」というスローガンをかかげて、資本主義的生産支配の横暴から生命生産をまもろうとした。

『恋愛論』は、高群逸枝自身が終章で語つてゐる権成したがえば、十章のうち最初の三章は「自然現象としての恋愛」をあつかい、残りの章は「社会現象としての恋愛」の歴史を世界史的な通史として辿つてゐる。高群は「これまでにでている恋愛論の多くが、主として自然現象としての恋愛をとりあげているのとは、おもむきをか

えて、主として社会現象としての恋愛をとりあげている。」のがこの本の特徴であると主張しているのだが、私は最初の三章にあらわれた生物主義の物の見方は、残りの歴史の章にも残っていて、高群逸枝の歴史観の特長を示しているように思う。

自然現象としての恋愛を論じるとき、高群逸枝は「生物はかぎりなく子孫を生み、かぎりなく子孫を増殖するものだ」という説をとらない。」と言っている。また「近代の恋愛論ではたいがい恋愛と生殖とを一元的にみていく。この書はこれを別箇のものと考える、ここに私の学説（仮説）が成立する。このことは実践におよぶとき大きな差異をもたらすであろう。」と言い、「恋愛は合体（もしくは自己消滅）を理想とするものであり、生殖は分裂（もしくは自己保存）を意志するものである。これはアミーバの昔から不变の原則なのである。ではこの両者の関係は、究極なにを指向するかといえば、（……）それは人類の無限の増殖よりは、人類の完全な合体一無性化、そして人類の寂滅（もしくはさらには他の新生命への発展）なのである。」と言ふ。恋愛と生殖の二元論には高群逸枝の精神主義への好みもあらわれているが、それよりも、二十世紀になって実現した産児調節の事実の重みが恋愛にもたらした質的变化をはっきりととらえている。また、自然現象としての恋愛のたどる道筋は、社会現象としての恋愛のたどる古代母系制社会以後の転落、「近代婚姻主義」から、子を産まぬ結婚への道筋に一致すると考えられてるのである。

歴史家としての高群逸枝の特長は、その是非は別として、実証研究をつみあげるときにも、彼女の視界はつねに有史數十年に限られないひろがりを有していることであろう。それは顯微鏡のしたのミクロの世界をのぞきながら宇宙をも視界のなかにいれる生物学者の視線に似ている。生産関係や階級闘争の歴史をひろい意味におけるるのである。

「恋愛論」第九章には、戦後の新しい時代に期待するかのように、二十世紀前半の社会革命思想が比較、紹介されている。しかしその後の私たちは、朝鮮戦争景気とその後の不況、ベトナム戦争と日本G.N.P.世界第三位の繁栄、再び不況、とめまぐるしい小状況の変化に流されてきた。そのなかで逆いもがき、いやおうなしに高群逸枝のいう「反抗と否定」の段階にいる。

今日「恋愛論」がひろく読まれるであろうという予想のなかには不況、失業、生命の不安といった現代の世相が考慮されているかもしれない。しかし、高群のいう生命の「空化」は少くとも何十世代を単位としてはかる巨視的次元でいわれているのであって、これをそのまま小状況にあてはめることは避るべきであろう。高群逸枝のなかにはたしかに史的予言主義があるが、これは彼女がなかば意識

るのである。

「恋愛論」第九章には、戦後の新しい時代に期待するかのように、二十世紀前半の社会革命思想が比較、紹介されている。しかしその後の私たちは、朝鮮戦争景気とその後の不況、ベトナム戦争と日本G.N.P.世界第三位の繁栄、再び不況、とめまぐるしい小状況の変化に流されてきた。そのなかで逆いもがき、いやおうなしに高群逸枝のいう「反抗と否定」の段階にいる。

不況、失業、生命の不安といった現代の世相が考慮されているかもしれない。しかし、高群のいう生命の「空化」は少くとも何十世代を単位としてはかる巨視的次元でいわれているのであって、これをそのまま小状況にあてはめることは避るべきであろう。高群逸枝のなかにはたしかに史的予言主義があるが、これは彼女がなかば意識

生命の歴史の一部としてみると「どうなれば、どのような結果をもたらすのだろう。

生命的増殖と無限発展説には、資本と生産の無限拡大をめざす資本主義的生産のイデオロギーの投影がある。これは歴史観においては楽観的に人間の歴史の発展を語ることになろう。高群逸枝の歴史観には、これとは異なる特徴があるようだ。高群逸枝は別のところでおそらくは自己反省のつもりで、次のように言っている。「ついでにいうと、アナキズムの欠点は、必然論でなく、発展説でないこと、したがつて婦人解放史に学的根拠を与えないことであるとおもう」（『女の歴史』二、全集第五巻、七四六頁）

すると、高群逸枝自身は、必然論であり、発展説をとるということがある。しかし、発展説という点では人間中心主義が進歩史観であるのと同じ程度に、高群逸枝は逆進歩史観をもつていて。同じく必然論、ただし高群は終局に人類の消滅を予想する。こういった違いは、高群逸枝が生活資料の生産と生命生産をまったく対立的にとらえ、しかも生産第一主義に圧迫される生命生産の側から歴史をとらえていることからくるのであろう。

一方、人類を生物の一種としてとらえるまなざしは脱イデオロギーに到達する反面で、人類間の闘争も超絶的にみることをまぬがれないと、森の家で高群逸枝は語っている。「愛とはゆるすことではなく肯定することだ、と私はこの森の住民たちを觀察して思った。百舌鳥や蜘蛛や蛇や蟻地獄たちの残酷行為はけつして私にはゆるせない。しかし人間をも含めて、すべての生命は、他の生命をおびやかすことなしには生存しえないことが肯定される。」（『火の国の女の日記』全集第十巻、二四九頁）『恋愛論』は敗戦後三年目に書かれているが、そこには焼跡のにおいは感じられない。高群逸枝にとっては、小状況である現実との接觸は森の家の入口で断たれていた。

して自らを通俗化する部分ではないだろうか。また高群逸枝が知っていた、そして私が子どものとき学校で教えた生物學は細胞の次元の、古典的で素朴な學問であった。今日の分子生物学は精密化するとともに生命を考えるときの苦悩を深めているように見える。

恋愛論は恋愛を公然と語るから苦手だな、と私は思う。生殖という目的を次第に失ってゆく恋愛とは個にとっては何なのだろう。私は高群逸枝のつかう人類の「寂滅」という宗教的なことばよりも、同じひとのいう「新生命への發展」という表現の方をえらびたい。終末があるのでなくして、私たちの行く手には未知があり、本能とえい知をたよりに虚無か希望か不明であるものをのぞきこむとき、私たちはひとりではいられないということなのだろうか。

一九七五・一一・一八

# 柳田國男の婚姻史像

—その機能と内容—

栗原弘

柳田は地方に伝わるさまざまな通俗を異様・珍奇とする蔑視的・好事家の態度を排して、通俗を伝える農民庶民の中に眞の日本の姿を求めるとした。従来の史学が、貴族・武士中心の歴史を追求し、平民の歴史を無視する態度を不満とし、文字から疎外され、名もなく日々を送る人々の歴史を再現する方法を模索していく。そうして、大正末から昭和の初期頃にかけて、彼を中心として民俗学界は学問的成果と厚みを加えたにもかかわらず、最も隣接している国史界は民俗学には冷淡それ以上に軽蔑さえもしていた。まさにこのようない時（昭和三年）柳田は東大史学会から講演を依頼され『婚姻制の考察』を発表し、翌年三宅米吉博士古稀記念論文集に『婚入考』として收められ世に出た。柳田は『婚入考』に史学対民俗学の一課題という副題を付し、長い間政治史中心主義的歴史を「歴史」としてきた国史学界に、生活史は「歴史」ではないのかと詰問したのである。柳田はなによりも文献中心の上層階級だけを対象とした歴史

画期的論文。まさに『婚入考』は婚姻史学史上不滅の価値をもつ論文である。

しかしながら、『婚入考』の新しさ、見事さは決してその本質的内容（婚姻史像）にあつたのではなかった。彼の採用した民俗学的方法にあつたのである。多くの人々は従来の史学になかった方法のすばらしさと論旨の整合性を不分離のまま誤解している。柳田の展開した論の背後にある婚姻史像自体は少しも新しいものではない。江戸時代（本格的に日本の先進地域において家父長的世界が確立した時代）の儒学者を中心とした「日本は常に家父長的世界であらねばならない」という当為（SOULEN）としての歴史観を明治の学者達はそのままの形で引継いだ。なぜなら、明治時代はより強化された家父長的世界であったからである。明治の学者横山由清は、かつての儒学者が確信してやまなかつた嫁取婚を絶対とした婚姻史像とともに『婚礼通考』を著した。この横山説をほとんどそのまま踏襲し、それを民俗学的資料によつて展開し、より学説化したのが柳田の『婚入考』であったことを高群は明らかにしている。<sup>②</sup> 民俗学的手法は當時として優先でありながら、婚姻史像は少しも発展性を持つものではない。というよりむしろ退歩したものであつたことに注目されたい。つまり、『婚入考』は前近代的儒学者的婚姻史像を樹林に包み覆われて、緻密な実証的外觀を呈し、儒学者的當為が見破れないところに安易に受け入れられる原因があると思われる。

それではもう少し具体的に柳田の誤謬を考察していく。『婚入考』を読んで氣付くことは、神様がないということではないだろうか。『婚入考』には婚姻と神との関係が全く言及されておらず、婚姻を労働力関係、家父長道德・人倫関係においてのみ解釈すること

を嫌惡した。この国史学の欠陥を克服する学問としての民俗学が高い水準に達しているにもかかわらず、一向に国史学から受け入れられない。それに対する認識の改善を迫る挑戦状をたまつけたのである。方言研究に於ける画期的研究『蝸牛考』（昭和五年）。故意に固有名詞を使用せず書かれた近代史『明治大正史世相篇』（昭和六年）等々。そして、昭和十年に岩波日本史講座に『国史と民俗学』が収められ、柳田を中心とした日本民俗学の長い間の努力はようやく認められ、学界に市民権を獲得し、以後その地位は不動のものとなつた。つまり、『婚入考』は台頭期の民俗学の期待を全身に受けた記念碑的論文であった。柳田の数々の挑戦に対し、長い間生活史を無視して來た国史界が充分な反論を出せなかつたのも当然であった。史学にとって不可欠の文献を使用せず、固有名詞を排して、名もなき全国各地の農民庶民の中に生きている習慣・習俗を素材として婚姻史を解明していくという従来の史学では想像もできなかつた

とに終始している点を看過できない。柳田が従来の歴史家の無視していた古き神々に鋭いメスを入れ、常民には力強い生活規範になつたことを世に知らしめたのはなによりも功績であった。彼は日本全国の民俗資料を駆使し、実証し、見る者をして圧倒せしめる。神一禁忌。禁忌の常民に対する無形の圧力については、柳田の特に明らかにした点であつた。常民が禁忌を破ることは死と同じ程に、今日のように神を殺した世界に生きるものは感情移入が不可能に近く、想像を絶する程に意識していたことを柳田学は我々に教示してくれた。ところが、この柳田をしてこと婚姻に関しては全く神と人の関係が指摘されないのは、不思議といえは不思議である。常民生活の骨の随まで染み込んでいた神々を知りつくしていた柳田が、婚姻となると無視するのはなぜか。

それでは、柳田が『婚入考』を執筆した頃（昭和三・四年）に立返つてみよう。そのころの民俗（族）学徒には母系制を認めようとする動きがあつた。不幸にして三十四才の若さで死去した佐喜真興英は母系制の研究を行っていた一人である。彼は民族学的世界視野に立ち、沖縄を中心とした日本の民俗資料・文献を駆使して立証せんとした。母系制というと、今日の民俗学者は決つてバッフォン・モルガン等の外國の進化論学者の模倣ときめつけがちだが、彼の著書を見ると決してそんな紋切型の批判は正当でない。佐喜真興の研究は彼の死後、柳田自ら序文を寄せ、大正十五年に『女人政治考』として出版された。その中で佐喜真興は

近代文化人は結婚を近代風に宗教儀式と切りはなしで觀察する。

(...) 然るに原始古代社会にあつては是と大いに趣を異にし婚姻は一の宗教的祭祀なるを見るのである。北海道のアイヌは刀剣を結納の形見に取りかわした後、家父は火・神の前に次の如く祈る。

「吾々は今、吾々の息子と女を結婚させすべく取り決めた、アー、

汝、火の女神よ、之を見護り給へ……」と。古代ギリシャ、ローマも亦火神（以上傍点原）の前で結婚式を行つた。神の存在する國に於て結婚が祭祀なるは是でよく分る。

と言つて、火の神と婚姻との関連に言及した。

さらに『舞入考』が出版される前年に、中山太郎は柳田に捧げた

『日本婚姻史』を出版した。中山も日本に於ける母系制を主張し、招婿婚との関連にも触れている。同書で「竈神と新婦とを結合させる儀式」及び「聖火によつて行はれる呪術の三様式」の項で、火の神と婚姻の関連を詳述している。中山は、肝寶な点で叙述の精密さを欠く上に、余計な表現が加わる欠点があり、私自身も全てを否定できない。しかし、

我国の家の家（最初は火の神であった……）はその家だけを守護する神であつて、同じ村に住み同じやうな祭祀法を伝へ、更に同じやうな墳墓を有してゐても甲家の神は乙家の神ではなかつたのである。（…）同じ血筋といふことは、同じ火種の火を用いた事によって証明されてゐたのである。

という見解はすぐれたものと思われる。

このように柳田が『舞入考』を執筆する時、彼の学問に近い人が母系制を認め、それを実証しよう試み、しかも婚姻と火の神との密接な関係に言及した著書があつたのである。それでは、柳田が『舞入考』以下十編の婚姻論文で火の神について如何に触れているかを見てみよう。私の読む限り、次の三つが火の神關係の資料として考えられると思う。

（秋田では）舞が若者宿から仲間の者を案内として、酒を持つて婚家を訪問し、其家の爐傍を三周して祝言を綴する風があつた。  
(舞入考)

（筑前大島では）若者連が屋でも組の提燈を點し、締太鼓を打鳴

の火の神に拝する等の例がある。これらの儀礼・習俗はすべて火の神に収斂されるものであり、如何に火の神が婚姻と深く関連しているかが推察されるであろう。くどいようだが柳田の直弟子の顔川清子氏が次のように言つてゐることを通じて是非とも火の神と婚姻の問題が大きいことを理解していただきたい。

一人の女性が甲の家から乙の家に移り住むといふことは、当人にとっても家にとつても重大事である。それを敢行しなければならぬ嫁入婚に火の儀礼が多いのは当然のことである。（…）古人が抱いていた火に対するこの固執は、家に対する固執の表現で、女性が家の火の管理者、家の神の祀りであるとすれば父と息子の間の性的禁忌にもまして、嫁と姑の間にはよりつよい反撥の理由があつた……。

民族学の立場から佐齊眞が、文献民俗学の立場から中山が、柳田学の立場から顔川氏が婚姻と火の神の密接な関連に気付いた。そして、少くとも前者二人によつて『舞入考』が書かれる前に火の神と婚姻の問題が、柳田国男その人に提示されていた。しかし、民俗学の大家の柳田のみが、まるで氣付かぬ如く一切火の神と婚姻の関係について触れないというのは、奇妙と言つよりも、それを越えて異常だと言わねばならない。柳田は類例の少ない習俗を不用意に云々することを極力諱める。けれども、火の神と婚姻の場合は言い控えるにはあまりにも類例が全國的に多すぎるるのである。もはやこの時点で「柳田は火の神と婚姻との重要性を知らないで看過したのではないか、意識的にこの問題を避けたのだ」と私が主張しても異論はないと確信する。

では柳田は何故に火の神の問題を回避しなければならなかつたの

らして云々。

（仲人及び世間）

（沖縄では舞入の時）家の火の神と祖靈とを押すのが定めとなつて居たが、其場合には新婦となるべき者も云々。

（婚礼の起源）

これらの三つの史料は、何故に舞が女家の爐傍を三周しなければならなかつたのか、何故に屋間にわざわざ提燈を点ずるのか、何故に舞が女家の火の神を拝するのか等といふ疑問を發するため柳田が引用したのではない。すべて火の神とは関係のない他のことを述べようとした資料に、たまたま火の神と関連することが記されているにすぎない。つまり、柳田は十編の婚姻論文のなかで、唯一度も火の神と婚姻との関連については触ることはなかつた。民俗学者が全然言及しない程、婚姻と火の神の民間習俗との関連は取に足らないものであろうか。では柳田が著している『常民婚姻史料』から拾つてみよう。最も一般的なのは、嫁が生家から娘家へ移動する時に送り火・を迎え火を焚く習俗である。これはムカヘイチゲン（武州・上州）・ヤリビ（越中）・ムカヘミツ（信州）・タイマツフリ（上総）・カサカブセ（下総）・ヨメノヒタキ（肥前）として採集されている例の中に見出される。同史料は柳田が火の神の儀礼の例を示そうと意図したものではないがそれでも分布は全国的に看取される。この婚姻儀礼は葬式や盆の時に行うことと同様の形態であつて、儀礼の中でも重要なことが理解されるであろう。又婚礼の時、嫁に釜蓋を被せるとか、夜はもちろん昼間でもわざわざ提灯をつけるとか、嫁その他の人に鍋屋を顔につける等々の習俗は全国各地に見られる。そして、他家から嫁が入る時に、両親と子供夫婦が別居するいわゆる隣居は、庭つまり火を別々にすることに本質がある。沖縄では香炉をもつて嫁入するとか、前述の嫁が嫁の家

か。この点を考察するために、柳田が主張する「主婦」像をみてみよう。今日、主婦を意味する語は、家を代表する語として残留しているが、それについて

何故にオカミ・オウヘ・オマヘ・オカタ等、家の表の間を意味し又は本家宗家を意味する語を、亭主家長に付与せらずして其配偶者の女性に持たせたかということである。是は昔の世の男の仕事が職人や小売商の如く家屋の内に行はれるものが少なく、農漁樵はもとより、獵でも戦でも亦祭でも、すべて屋外の活動を主として居た事實が説明する。即ち屋内の殊に牀の上の事務を掌る者は、本来は主婦であったことを意味するらしいのである。是は勿論曾理者といふまで、主であり支配者であったといふのではあるまいが、それでも東北地方に行くと、今でも主婦のことをエヌシという処が少なくない。云々。

長い引用であるが、重要なことなので頗るくば繰返しお読みいただきたい。柳田の解釈にはあくまで日本は一貫して父系制社会であつたとする歴史像に立脚していることがよく表われている。彼のよう父系制絶対史家にとって、常民世界で根幹となる家・祭祀の中心を意味する語が男にではなくて、女に付与されて残留していることは実に苦々しい事實であったろう。古代も父系制社会であつたならば決して起りえない言語生成現象・主婦を意味する語が家の長を意味するものとして残留すること。

私は柳田の母系制観（後述する）を研究した結果、柳田は自己の歴史觀に矛盾するような現象を、上述のように解釈することに自信がなかつたと判断している。（つづく）

# アート

\* 吉岡修一郎

「高群逸枝の業績と生涯」（吉岡修一郎）  
の冒頭を抄録させていただく（編集室）。

多くの動物を観察すると、発情期のオスがメスに性交をいどみかけても、メスが欲しない場合には、オスは自制して辛抱する。暴力を使うようなことはしない。無論メスが欲するときは、オスは容易に応じる。また、メスがオスを選ぶのであって、オスがメスを選ぶのではない。メスはより好みがきびしいが、オスはそれほどではなく、大概の相手で用がたせる。（無論これは、据え膳くわねは……などというさもしい根性とは何の関係もないなし。）

人間だけは、男の好きなように女を利用す場合が多く、ときには男が女に対して暴力行為に出ることさえしばしばあるし、さらに男の方が女を選ぶのが普通で、女が男を選ぶことが少ない。——このようなことは、動物界一般の通則から見て、不自然ではないか。少なくともそれは、人類の最高進化の本質から起つたものとは考えられない。それに大抵の

ご心配をおかけしましたが、なんとか希望をもって生きていますから御安心下さい。あなたも無理なさらぬよううれぐれもご自愛を折ります。

\* 前略 私は名古屋で高群逸枝をかこむ女人（延べ10人以上、常時5~6人）と『女性の歴史』の読書会をやってきましたが、ほんの2年間かかるこれをやつと終わり、この九月から『招婚婚の研究』に挑戦しています。

「逸枝雑誌」の存在も知り名古屋と東京のあちらこちらの本屋をさしまわりましたが以下の号がどうしてもみつかりませんのでもしバクナンバーの残りがあればお送りいただけませんでしょうか。また今後発行のものについては定期購読を申込みたいと思いますのでよろしくお願いします。：△名古屋△

バックナンバーはなくなりました。30号の31Pをごらんください。

\* 小野沢由美子

…私の三月卒業しまして横浜を離れ、長野県の木曾で中学校の教師をしております。

三月からこの間「教育」なるものに没入でき

ぬ自分を痛く感じながらも自分を日常的なものに埋めてしまつたように思います。私

の中にある「逸枝」が私から離れていきそうになるのを耐えがたい思いで見つめながらき

動物は、オスの方が美しくてりっぱなのに、人間だけ、女の方がケバケバしい化粧や衣装でムリにでも男の目を引こうとするのも、自然ではないか。

人間以下の動物でさえ、性行為はメス本位に行なわれ、生殖はメスを主体に、オスがメスに奉仕することにおいて遂行される。そしてメスが、強いオスを選ぶばかりでなく、生

殖のためのナワバリの確保をその選択の重要な条件とする。

人間ともなればさらに一步を進めて、身体

性格・知力のすぐれた男を女が選ぶだけではなく、性行為においては男が女を楽しむことに自分の存在意識を見いだそうと努力するのが男らしい男ではないのか。人間の女と男が、単にメスとオスであるばかりでなく、その上にさらに女と男である所以のものは何かと言ふのが男らしい男ではないのか。人間の女と男が、えば、性行為において女を本位とし女を楽しむことを主眼とすると同時に、生殖と育児との営みの母系家族を本体として遂行するところにある。——それだからこそ女と男は人間なのだ、とわたしは思う。

一九一一年（明治44年）の9月、「青鞆」創刊号で平塚らいてう（明子）の宣言文の冒頭の元始女性は太陽であつた。真正の人であつた。

私のには、このような抽象的なことしか申せません。恥かしい思いです。

卒論の題は「高群逸枝の『母性我』思想序

た四ヶ月でした。しかし改らため私の「逸枝像」を更に追求することが私の原点であることをこの夏休みに考えさせられました。今

の私は、このような抽象的なことしか申せません。恥かしい思いです。

\*

伊藤道子

…△多摩△

「女性」脱」というもので、原始女性のもつ“母性我”なるものが逸枝の研究に至るまでのなかでどのように思想化されていったのかを追求しようといたします。“母性我”を内包している逸枝像の追求といつてもいいかもしませんが、核心にふれえないもどがしさをかえ

たまま今に至っています。

「逸枝雑誌」以後はこちらにお送りいただきたまいまに至っています。

何もまとまつたことを書くことができませ

ず、申しあげなく思つておりますが、今後もどうかよろしくお願いします。：△木曾△

石川礼さんの『逸枝伝』と石川さんの『逸

…私この三月卒業しまして横浜を離れ、長野県の木曾で中学校の教師をしております。

三月からこの間「教育」なるものに没入でき

ぬ自分を痛く感じながらも自分を日常的なものに埋めてしまつたように思います。私

の中にある「逸枝」が私から離れていきそうになるのを耐えがたい思いで見つめながらき

しの思に通じるものだったはずだ、とわたしはいま考へている。

この思想から出発するのでなくては、ホンモノのフェミニズムはありえない。ここから出発して、しかも女と男との異質性と協同性との十分な認識の上に、男女の間の深い愛情とたがいに与え合う真正の近代的同権とを、現実に築いて行くことができる。（下略）別項紹介掲載参照。（九産大教授・哲学）

\* 村上信彦

小生、この春（50年）ごろより喘息の發作に悩まされていましたが、ついに心筋梗塞と心不全で五月十二日入院しました。その後因済湯を併発し吐血二回、心臓マッサージでようやく意識をとりとめると同時に大量の輸血（200cc×20回）を行いました。約八十日間入院中に脳血栓に罹され、運動神経をやらかして歩行困難で、いまだに外出できません。気永にリハビリーションをつけければならない回復するとは思いますが容易なことはありません。

これまで病氣らしい病気は一つもせず、病院などに縁のない自分ででしたが、六十六歳になりました。病院生活をつづけ八月二日に退院しましたが、たため歩行困難で、いまだに外出できません。しかしこれも運命とあきらめて今后の生活に処するつもりです。

また、石川さんが「神經過敏におちいついた」逸枝と「胎児とふたり…いるのが愉快しかった」逸枝とのつながりを次回で追究するという予告を読んで石川礼さんの『逸枝伝』を読み進んでいくと「彼女は、自己救済の天才で…」ということばによつかり、またびっくりしてしまいました。

石川さんがこの「自己救済」をどう受けとめるのか、また捨て去るのか、次号が待遠しい気持であります。：△仙台△

毎回高群逸枝雑誌をお送りいただきありがとうございました。早いもので又、一年がすぎてしましました。その間に、逸枝女史の「女性の歴史（上）」を中心に「火の国の女の日記」等の読書会とも勉強会とも名付けようのない余合でしたが、小さな集まりを持ったのは一つの成果だと思っております。

現在私たちの在る状況やこれから生を考える時、必然の結果として考へざるを得ない性の問題を「女性」という処に視点をすえて考へいくことの輪を広げられたというたつ

た一つの点においてのみの成果でしかありませんが……。

今度、「恋愛論」が文庫に入るそうで喜んでおります。△△東京△

\*

坂田峰子

私は現在熊本大学の二年に在学している者です。この夏より、かねてからの念願であつた高群逸枝に取り組もうと思い、今資料を集めています。

高群先生の存在を知ったのは、一昨年何げなく目にした村上氏の朝日新聞の記事を読んだからです。実際にしたのは、四回連載中の一・二回分の記事でしたが、鮮烈な印象となつて残り、先日その記事のコピーを手に入れることができました。その当時、私は大学にはいるにあたって、その中でじっくりと取材をしていました。今月発行の28号まで発行高群逸枝文庫に出かけて、そこでこの雑誌のことを知りました。28号より発行毎にお送りいただけたらと思っていました。

女性としての主体、自律意識に何か基底となるような知識・認識を得たいという願いがありました。そのため女性を描いた作品や女性の歴史をさぐってみたい、特に母系制社会についての記述も読んでみたいと思つて、しました。それが村上氏の記事は、まさに私の欲求のすべてを満してくれる存在者がいること

\*

伊ヶ崎栄子

## 高群逸枝のまなざし

「恋愛論」解説

石牟礼道子

この世の成り立ちが見えてしまうまなざし、というものがあるとおもうのです。

マドリード、プラド美術館にヒエロニムス・ボッショの、かの「悦楽の園」と呼ばれ、通常——天國、現世、地獄——と解釈されている絵があります。地獄を描いたとみられるパネルの中央あたりに、「樹男」と呼ばれている不思議な顔があり、彼こそ地獄の王かもしれませんとか、アダム教の最高の指導者があらわれているのではないか、と言われていて、この十五世紀の幻想画家についてのナブ説きは、二十世紀に入つてからにわかつて研究者たちの心をひきつけてやみません。

私の関心はなかんずくその樹男のまなざしにあります。ロンドンの出版社から出たその画集の顔の目は、この世の成り立ちを凝視しているうちに、ついに彼の目そのものが、この世の虚無をあらわしてしまう、そんなまなざしなのです。

取りの鳥の子が、まだ処刑されることを気づかないらしい小心な男の手をひいてまわっている。樹男のまなざしから眺めた全景は大処刑場になつていて。上方には、まるで現代の物質文明のゆく末を見れるような毒ガス工場様の城砦があつて、そこから上の噴炎が上空を包みこみ、その下の、濁った血のような池の中には、おびただしい人間たちの死骸が浮いている。樹男の下にはリュートとハープの合体した楽器や、手まわしのハーディ・ガーディ、管楽器のポンバルドンなどが、人間を捕えて人間楽器をつくり、これを演奏しながら処刑しているし、巨大な耳も切りさかれて罰されています。

中央パネルの悦楽の園ではこの図とはうつてかわり、裸体の男女たちが、玄妙な生命を得ている花たちや果実や鳥たちや魚たちや、鹿や山羊や貝などとともに、無心なほどな生の中でたわむれてしまふよく見れば、うつくしい黒人をはじえたこの男女たちの表情も姿態も、なまないのちを昇華させたような、どこかしらこの世のものではないようにも描かれており、白い鹿や白い象や白馬などの動物たちの、ひとときわ繊細可憐な姿にくらべ、ひとびとの集散してい

を知らせてくれました。それも女性史の資料を与えてくれるのみならず、一個の女性としての人間的魅力にあふれた存在者がいること、それも身近な出身者（私自身は松橋町と中央町にはさまれた豊野村の出身です）であると

ことを知つて全く嬉しくてたまりませんで、した。でもこの二年間余り、自分自身の内的準備が整わずに、作品の一部を軽く読むだけにとどまつていました。

この夏からこそはと思つて早速松橋にある高群逸枝文庫に出かけて、そこでこの雑誌のことを知りました。28号まで発行高群逸枝文庫に出かけて、そこでこの雑誌のことを知りました。28号より発行毎にお送りいただけたらと思っていました。

この夏からこそはと思つて早速松橋にある高群逸枝文庫に出かけて、そこでこの雑誌のことを知りました。28号まで発行高群逸枝文庫に出かけて、そこでこの雑誌のことを知りました。28号より発行毎にお送りいただけたらと思っていました。

昭和四十一年に当地に引越して参りました孫を連れて桜遊園地へ参ることもたびたびでした。四十三年六月七日、遊園地の碑に記されたが、一度は水俣にも行き、高群先生のお墓を訪ねたいと思つて、先生にも実際お会いすることが出来たら本当に幸せだなと思つています。△△熊本△

また「暮の手帖」33号に「私の読んだ本」という欄に投書「火の国の女の日記」講談社文庫本、牧野千恵子（二十六才）のそれを読み、ペンフレンドにもなりました。

- 24 -

るかなたこなたの塔は、なぜかそれよりは肉質をもつて生きていて、全國の中におかれている真紅のちいさなまんまるい木の実が、宝玉めいておいしそう。左のパネルのイブやアダムのいる図をも含めて、人びとの出入りするところには、必ず球体をした、卵殻形のひびわれを持つ巨大な花だとか塔だとかが配されている。球体を刺しつらぬいてる突起物を組合せた塔は、官能的な生命をもつたピンク色の岩でできています。

おもしろいことには、地上から浮揚しているようなアダムとイブのいる天国園の下方に、ねずみをくわえて、のんびりとしつばをのばしながら立ち去ろうとしている野生の猫が一匹、描かれていて、幻想的な「恋愛の園」の中では、それが唯一、生活者の相と永遠の日常とでもいうべき雰囲気を湛えているのは、じつにはほえまいのです。そして、あらためてこの全模図を眺め直してみると、やはり樹男のまなざしが、ここに描かれている世界の意志を無限に沈めて、私たちにむきあつてることに気づきます。

私はしばしば、この樹男のまなざしを、高群逸枝のまなざしに置きかえてみます。するとそこに、ひとりちがう天地創造とその寂滅の図とが、東洋の陰影をもつて入れ替りながら、浮上してくれるのをみるのです。高群逸枝という存在は、やはり、この世の成り立ちを、生命系の秘奥から、のぞきこんでいるまなざしだったとおもうのです。そして、そのまなざしに覗えているであろう世界と、一個体である彼女がそれを語ることとの間に、当然の差異は、かえって彼女の天地創造図絵に、深いふくらみを与え、あやなる影を搖曳させていると思うのです。

創造者として、彼女は、自分の作品を私たちに手渡すとき、受取り手もまた底しれぬ存在の深所にはいつてゆきうるような秘鍵を、おのが作品の髪の中にしのべてくれているようにおもわれます。

汝洪水の上に座す  
神エホバ  
吾日月の上に座す  
詩人逸枝

と書いて大正詩壇の嘲弄を貰つた話は、これからも彼女およびものいうときの女たちの上に形を替えてくり返されるにちがいありません。

曲の無限もまた世界のいとなみのうちにあり、真の間こそは光をともしだす力でもあります。そのような意味での世界というものにはじめてむきあつた魂が、未知のもののに打たれながら、あかつきの天を待つて、五官の隅々もまなうらも、彼方の曙光とともに

に舞うような本能の極限では、光はわれ、というふうになるのではないでしょうか。たぶんそのような瞬間に、女性の官能は、この世とはじめて交感しうるのではないでしょうか。

彼女が好んでその著書の中によりいたわが上古の女性たちの感受性、ことに「母系制の研究」の姫彦制のはじまりの部分でふれられている象徴的なアマテラス神話は、その意味で、彼女が身をもつて書いたのだとおもえるふしがあるのです。伝説的な「森の家」の生活は、彼女にとってはたぶんその姫彦制のくらしのままごとであつたかもしれません。早のみこみすれば通常の意味での進歩主義、とも理解されそうな彼女の論理をつむぐ感性は、上古の向日性を保つて香っているのだとわたしにはおもわれます。

いのちの糸が発するこまやかな光。そのような糸で織りなされてゆく、ちばん内側の、最初の、うすいやわらかな透明な瞼。そのよう

うに、宇宙の薄闇の間にかかる一箇の瞼をイメージします。

瞼の中にはほとんど静止しているようにさえみえる生命的のいとなみがみえる。それはもつとも本源的な雌のイメージです。その一見うごかない内部活動のゆえに、透きとおるよううに手織られたやわらかい瞼。彼女の恋愛論にむかうとき、たえずわたしにあるイメージはそんな風になるのです。

「恋愛論」はいきなり、広辞苑からとつて来たような解剖学的、科学的な言語ではじまります。「卵と精虫」とが接融合する器械的作

用を、観察してみると、精虫はみずから運動して、静止する卵細胞のほうにゆき、その卵中に入るのです。……精虫が卵のほうに進むとき、とまどはず、一定の方向にゆくのは、はたして精虫にどんな気持やおもわくがあつてのことだろうか。……種々の原生動物は、ある一定の光線、温度、ある物質の溶液等、おのの好むところにしたがつて、そのほうにあつまることが蠅の甘きにつくようなも

彼女は、意欲的、前進的な言葉の数々をよく書き残しましたが、むしろそれは、彼女が終生感していた、生命世界への慎しみから発していただのではないかと思われます。

彼女が、「恋愛は合体（もしくは自己解消）を理想とするものであり、これにたいして生殖は分裂（もしくは自己保存）を志すものである。これはアミーバの昔から不变の原則なのである。ではこの両者の関係は、空極なにを指向するかといえば、それは人類の無限の増殖よりは、人類の完全な合体——無性化、そして人類の寂滅（もしくはさらに他の新生命への発展）なのである」

と「恋愛論」の冒頭において「うとき、この世の生命の寂滅をみているまなざし、女性、すなわち母性の、役割りとしての宿命的な悲母のまなざしをわたしたちはそこに感じます。現世というものは病まさるを得ないのだというのだが、生涯を通じての高群逸枝のまなざしでした。病まいの種を宿さざるを得ない、現世にも照る太陽」

のである。精虫が卵のほうに進む場合も、ある一定の刺戟にたいし衝動をおこし、その方に牽引されるものと思われる。この、ある一定の刺戟というのが、恋愛上の「美」の起源で、それにむかつて衝動をおこし、牽引されるというところには、すでに恋愛意志（生殖意志を裏づけた）の存在が、みとめられるのである。恋愛とは、合体の本能であり、生殖とは、分裂の本能である。この二つは別箇のものであり、無関係ではない相反するものである。自然意志はこの二つをかち合わせながらしたいに生殖を弱め、長い年代ののちには無性化（性的完全な合体）へと、歩みいたるのではなかろうか」と彼女はいい、恋愛と生殖を一元として種は永遠の増殖へむかうであろうとする「説をなす多くのひとと」と自分の仮説はちがうということを冒頭の第一章第二章で述べています。

地球的次元での物質文明の崩壊期に突入してしまった時代ではもはや、わたしたちの両性は、完全な合体をすら遂げえないままに無性化にむかい、人間だけでなく共生者である生類たちをも巻き込んで自滅するのではないかと思われてならないのですけれども、彼女の合体願望はよくこの時代の出現を予言し、かなしいまでの到達点を示して、私たちにある覚醒をうながします。しかもそれは、彼女の日常生活次元においての第言でしたし、自己の恋愛史を、つまり合体化を生活した女性の第言であれば、なおさらに切実です。その意味で、彼女そのひとが、恋愛論の花火のいとなみであります。

この著の成ったのは昭和二十三年、五十四歳で、このときそのライフワークである「大日本女性史」全五巻の予定のうち、特殊研究第一巻の「母系制の研究」はすでに出版をみており、昭和十三年からひきつき着手された「招婚婚の研究」はもう十年目をむかえていて、恋愛論を書く直接のきっかけは、予定されていた生活費と研

究費が絶えたからだと著者は書いています。けれども、その三年後には「招婚の研究」は脱稿し、そのあと通史としての「女性の歴史」にとりかかっています。「恋愛論」は、彼女自身、「うたがいもなくこの書は私の習作である」と云っていますけれども、中絶しました「火の国の女の日記」をのぞけば、「今昔物語」の中の庶民たちの婚姻例を主資料とした「続・招婚の研究」の成果をとりいれて、

そのライワークがほぼ完結に近づいた最後の著作「大日本女性史」とならべてみると、この恋愛論は、全詩集「日月の上に」とともに、「大日本女性史」全巻の中の、もつとも内質的部分、その原衝動をなす部分に当ると思われるのです。

ことにその詩集や随筆集「今昔の歌」をひもとけばよくうかがえるように、彼女自身生涯を通じて、じつに可憐な恋愛者でした。その対象はしあわせしことに一生夫懸念にむけて較られ、全的な生活が、そこからのみ展開されてゆくという形がとられました。それはまことに典型的で、いわば一種の理想像の完遂であったといえるとおもいます。

全的な生活とは、この世には男と女とがいることから人間の社会というものはすべて始まるのであり、日常的に偏見なくこれを見てゆきたい。男性とともにこれを見てゆきたい。女性の（自分の）のそむ恋愛生活とともに、男性もあってほしい、この願望こそは社会生活の中心であらねばならない、と彼女は自身の恋愛のなやみの中で思っていました。そのような自分への行動規範として恋愛論を考えはじめ、ぼう大な女性史の探求となつてゆきます。まったくそれは当りまえの願望なのに、わが国でも、むしろ下層とされる生活者の中には、このような願望はまま生活化されてもいるのに、現代では、男性も女性も、そのような願望をひらたく口にするさえ、あるとまどいを感じてしまうほどの寂寥におちいついて、その要因を

ヨーロッパの恋愛史や性革命などにたずねようとしています。

逸枝は、まずギリシャ史の上にみえてくるヘテレたちと、哲学者たちとのまじわりなどをひきながら、そこにあらわてくる恋愛観を開拓してみせます。西欧諸国の例は、もちろん主テーマである日本の婚姻史にすべて収斂されてくるのですが、彼女は、ウォードの「女性は男性のよりよき特質を調節し選択してきた」という説を紹介しながらもいいます。

「男性の肉欲の具として女性がつくられたというヴァインガーネの言葉は、人間において一面の真理であるといえよう。だが、男性のこの種の選択が極点に達したとき、そのいっぽうで、男性一とくに知性において優秀な男性のあいだに恋愛感がおこり、ここから、かつての女性の選択に似た、善良な意志をもつところの選択が、男性によつてもたれてくることも事実であろう。それは、女性を自己もしくは自己以上に引き上げようとするものであつて、あるときは、ダンテ等のような女性尊敬となり、他のときは、ショーペンハウアーや、ニーチェや、ヴァインガーネのような女性蔑視となるのである。このようにみてくると、この本能は男女交互に、または相互に、用いられるものと、私には思われる」そして、「それそれの特質よりも、全生物を一体系につらぬく特質のえらびかたをも、女性はしてきたように思われる」とい、この言葉は、私たちの中にないがいあいだわだかまつたままになつてゐる生命的な全的欲求、美的欲求ともいうべきものに表現をあたえ得ているのではないかと思うのです。

この恋愛論の下敷となつてゐるのに大正十四年に書かれた「恋愛創生」があります。「恋愛論」よりはととのいはみられませんが、彼女の芸術的感性が旺盛していて、その感性の前に、はらりはらりと世界が展開するようなおもいがしますが、それにはいつそう、内

心の吐息がはかれてい、

「日本婦人の愛はひじょうに客観的になつてゐる。ひろい世界に日本婦人は住んでゐる。はなれてこの世をみてゐる日本婦人は、代々この、たとえばかの平安の女性たちのような客観的な哲學的な姿を、精神上の遺産をうけついできた。それで、恋愛、母子の愛、（集團の母的愛）いたるところ、自然を背にした日本婦人の宇宙観的な姿は発見される。消極的なあきらめ、無気力な姿とあやまつた観察をするのが多いけれど、消極的なあきらめでも無気力な姿でもない。

愛のある客観である。けれども日本婦人の精神は宇宙観にだけ生き、そこからこの世を眺めていることだけを全としているのではない。それは日本婦人の精神にとって、極めて不幸な時代の状態である。

私は悲しい。はるばると太古から流れてきた、日本婦人の精神は、一本すすきのような悲哀をおびて、私のうちに生きているのが感ぜられる。——明日のために戦つてゐるもののは、えとしてひとにはわからない。戦いが本質的であるときには、理性的なものではなく、いつそう根本的なものである。それでひとは、それに醜悪という名をつける」

吾はもよ、女にしあれば、汝を置て、男はなし、汝を置て、夫はなし、鏡垣の、ふはやが下に、心しづすま、柔やが下に  
桔梗すま、さやぐが下に、沫雪の、わかやる胸を、桔梗の、  
白きただむき、そだき、たたきながら、真玉手、玉手さまさき、股長に、寝をしなせ、豊御酒獻らせ。

をはじめ、万葉のおとめたちの歌をひいたあと、わが國の婦人は、

恋の資格をじゅうぶん備えていたにもかかわらず、上代をおいてはかには恋の時代をもたず、その心にはいつも悲哀の雲がかかつてゐた、といいます。わが國の男には、西洋人のような利己的なところが少ないかわり、粗雑なところがあつて、昔からかつていちどもわが婦人たちを理解しようとして自分での流儀で洒落の材料にしてしまつた。その洒落の材料であるわが國の婦人こそ、世界に類のない聰明な婦人であったのに、と「恋愛創生」で怨じています。

三界に家なき時代は女性たちだけでなく、いま男性たちにもやつて來たと思われます。家族制のくびきを脱しようとして、現代のホームは、うたかたのような核家族をつくり出して来ました。これからも当然女たちはえたいのしれぬ蒸発本能をおこしつけており、かかるわらず、教養のないものがかえつて直接味到し、一体化することができる。そのような感情の恍惚だけが、このような感情の持主



### 刊行の趣旨ときまり

この雑誌は高群逸枝に関する研究成果ならびに資料の掲載を主たる目的とする。季刊。印刷限定 1000 部。現在寄贈約 200 部（寄稿者・図書館・ジャーナリズム関係等）、約 800 部を購読者に発送。

定価はつねに経費以下とし、有料広告不載、カンパ辞退、不足分は高群著作印税より補うたてまえとなっている。

購読は直接予約制。1年4回（冬春夏秋）分 800 円（送料不要）か 5 回分 1,000 円を添えて申し込みのこと。送金は振替（東京 46833 番、高群逸枝雑誌編集室）か切手代用または現金などで。

印刷者 下田 等  
TEL (09643)2-3131

### 編集室メモ（30）

雑誌 30 をおくりします。健康上から一時は 20 で廃刊の考えをもったこともありました。さいわい悪条件ものりこえられて、いま 30 に達し。感慨なきをえません。こんど何号までつづくことだろうか。

寄稿者と読者とのご支持でここまできました。さらなるご援助をお願いいたします。

村上信彦氏が長い病院生活をおくられていたことを理論社の藤井良氏から教えられるまで、ちっとも知りませんでした。もう退院のこと、一日も早いど

快癒を切に祈っています。

- ・また柴田道子氏が急逝せられたことも他から教えられるまで知りませんでした。切にご冥福を祈りあげます。
- ・石牟礼氏「最後の人」が欠稿になりざんねんです。次号をまつばかりません。前号欠稿の石川氏からは、「高群逸枝論」の続稿を寄せられほっとしました。
- ・講談社文庫の「恋愛論」が発売になりました。石牟礼氏の「解説」を、筆者と文庫責任者梶氏のおゆるしをうけて再録することができたことをよろこびたいと思います。
- ・さらに西川祐子氏から「『恋愛論』を読んで」をいただきました。編集者の幸です。「恋愛論」は定価もやすいものですから、男女の別なく読まれてほしく思っています。
- ・バックナンバーは 29 は 1 部もなく、28 と 27 が数部あるのみ。書店送りのところに残部があれば返品を願っているのですが、まだ 1 部も返品されたことがありません。東京の復刻版は 15 までできているとのこと、希望者は東京都大田区西馬込 2-6-21 吉益方の発行所に問い合わせの上お贈めになってください。
- ・この号から寄贈分や書店取扱を減じます。そして各号発送ごとに 70 部見当を、あたらしい購読申込者のために残して置くことにします。新発行から次の発行までの 3 か月間に、これはだいたい消化されますから。
- ・次号原稿しめきり 1 月 18 日。

1975 年 11 月 30 日 (K)

「恋愛論」第八章近代娼婦主義の中で、彼女はエレン・ケイが「二十世紀は子供と母の世紀」と云つたのに對し、「正しく云えば二十世紀は子供と母の受難の世紀」と云い直したのですが、いまや母子問題はそのままに停滞させたまま、さらに父子問題の方が、より情けない姿で出現しており、きょうみのあることには、この片親の子をあずかる保育所で、保母とともに、保父の存在が要請されていることをみても、いかにこの社会が大地盤変動を起しつつあることでしょう。高群逸枝が「日本婚姻史」で予告しているように、旧家庭だけでなく、単婚家庭とても「社会の一體の断末魔的けいれん」の中にたらえられてしまつたからには、そのことごとくが一種壮大な連続爆発を起すのもやむをえません。それのみか、家の単位はもちろんのこと、都市と農漁村とにひき裂かれたそれぞれの共同体の地盤ぐるみ、ともにこの断末魔的けいれんにひとつたらえられているのは、続出している公害情況ひとつをとってもわかることで、このことはたんなる環境汚染や公害問題にとどまらず、彼女もよくいふように現代の大衆社会は、科学文明によつて物質化され、分断されて砂のように地ならしされた人間社会であれば、これはもう、社会といふよりは、これを包んでいる文明自体が、おのれ自身の毒素を噴き出している情況ともいえるのでしょう。

「恋愛論」の結びに彼女は貞操の復活を、とよびかけています。貞操とは恋愛上の良心であり、自然意志ないし社会意志の表現としての自主的選択意識を根拠とし、つぎにそれが男女相互の結合となるところの操作をいうのだと定義します。

貞操、といえば、この世の違和の淵源をこそ抱いている、という氣もするのですが、この一見あたりまえにきこえる提言をよく考え

てみると、ここで逸枝がいつているのも、現代の違和感の中に生きる私ども、いのちも思想も芸術も生活も一路衰死しつつある時代、脳や遺伝子まで科学の名においていじり出した時代の私どもの貞操、自己をも相手を見失つてゐる私どものさまよつてゐる貞操のことであり、それは性的モラルのみならず、私どもの生きてゆく操作の内面をあらためておもうのです。

現代人の生きてゆく操作の欠落感をおもうとき、私は彼女が「女性の歴史」下巻の中で述べている天理教の教祖中山ミキの出現による脳想を騒れずにはいられません。逸枝は「大衆的感覺」というものは、いわゆる「寄跡」をのみ追求してやまないものだとおもう。……「文明社会」の個人主義的宗教観にあつては、神と自己との密室における対決によつてのみ宗教はもつとも高度の展開を示されるであろう。これと対照するものは、原始社会の祭治制であつて、そのとき神は伴侶友らがいふようにいわしの頭でもよく、その他神体不明のものでも結構であつて、とにかく「お祭り」が中心なのである」といつていますが、こういう言葉を読めば、私どもが希求してまだとどきえない宗教的秘殿に、彼女のまなざしがとどいているのを感じます。

ゆき場のない操作、私どもの貞操は、もつとも閉ざされている本能ゆえに、もつとも予言的ななげきをもつて現代をながめているにちがいありません。彼女はまるで自分のまなざしの色のよう、神秘派のスーソーの詩を書きつけています。

なんじみずから的眼をもて  
この世のものともおもわれぬ草原をみよ